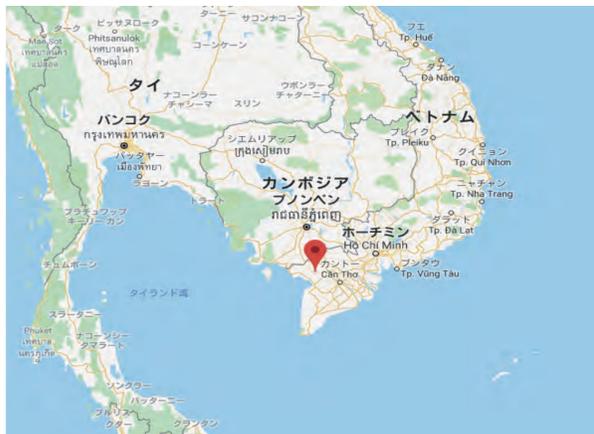


# ベトナム南部オケオ遺跡での調査研修

太田康幹、日下部かさね、難波勝士（岡山理科大学社会情報学科3年）

2017年9月3日～9日、私たちは山形真理子教授の指導のもと、ベトナムで遺跡調査研修を実施しました。研修場所はベトナム・アンザン（An Giang）省オケオ（Oc Eo）遺跡です。オケオ遺跡では現在、南部社会科学院考古学研究センターが発掘調査を進めています。私たちはその調査団に受け入れていただき、様々な研修を行いました。このポスターでは私たちが研修で学んだことについて報告します。



オケオ遺跡の位置



メコン川を渡るフェリーの上で



南部社会科学院考古学研究センターの先生方と記念写真



オケオ遺跡で発掘中の建築遺構（ゴサウトワン遺跡）を見学



初めての発掘、緊張しました



セパレーションの残留物から小さい遺物を種類別に採取します

調査でお世話になったベトナムの方：  
グエン・カイン・チュン・キエン先生（ベトナム南部社会科学院考古学研究センター長）、グエン・ウォック・マイン先生（同副センター長）、調査団の皆様、ありがとうございました！



キエン先生の指導のもとウォーターフローテーション作業に取り組みました



土器文様の拓本を採ったり、瓦の観察をしたりしました



調査団全員で鍋を囲む夕食、楽しかったです！

ベトナム南部のメコンデルタに位置するアンザン省オケオ遺跡は、古代国家「扶南」の港として栄えた都市とされる遺跡です。扶南は紀元後1世紀から7世紀くらいまで続いた国です。9月4日、私たちはまず、ホーチミン市歴史博物館のオケオ文化展示室を見学しました。その後、車でホーチミン市からアンザン省へ向かいました。アンザン省に入る手前で、メコン川を渡るフェリーに乗船しました。本当に大河だと実感しました。

9月5日から3日間、オケオ遺跡で研修を行いました。まずは、南部社会科学院のキエン先生の案内で、オケオ遺跡の中で行われている発掘現場の見学を行いました。水田中のルンロン遺跡の発掘調査は、現在、4.5mほどの深さまで調査が進んでいます。発掘で出た土壌から土器片や大量のガラスビーズなどが発見されていることから、古い運河に沿って文化層があると推測されています。続いて、パテ山（標高221mの山）の麓にあるゴサウトワン遺跡の発掘現場を見学しました。ここではレンガと石を積み上げた建築基礎の遺構が発掘されていました。研修の最終日に、ここで壁と排水路を掘り分ける作業をしました。レンガを傷つけずに土を書き出す作業は、現場経験のない私たちにとって非常に難しく感じられました。南部社会科学院の先生方や現地のワーカーさんたちと一緒に発掘作業を行いました。他にも、キエン先生に指導していただき、実際にウォーターフローテーションの作業の一部を体験し、残留物から土器片やビーズ、炭化米などの小さい遺物を見つけることができました。キエン先生にはドローンを使って、空撮で上空から遺構の様子を確認する作業も見ていただきました。

3日間お世話になった南部社会科学院のチームとは昼夜の食事を共にしたり、共同で遺物の選別を行ったりと、多くの交流がありました。とくに私は南部社会科学院の女子チームととても仲良くなり、仕事終了後、一緒に買い物に行ったり、スイーツを食べに行ったりして、交流を深めることができました。（担当：I16V024 日下部かさね）

私たちはオケオ遺跡内で、キエン先生を始めとする先生方から指導を受けながら、オケオ遺跡の土壌から軽い植物片などを水を利用してより分けるウォーターフローテーションという作業を行いました。フローテーション法（浮遊遺物選別法）とは比重の軽い炭化植物遺存体などが水中で容易に浮かび上がることを利用した、試料と土壌との分離方法です。土壌サンプルは遺跡内の文化層（土器や石器などの考古資料が地下の土層中に含まれる層）から抽出したものです。

作業手順は、目盛り付きのバケツに水10ℓを容れたものに、土壌サンプルを投入して土量を計測した後に、バケツ内の土を素早く細かく揉み解して、炭化物などが浮いてくるのを待ちます。底をくりぬいたバケツに0.3mmメッシュの布を張って、そこに向かってバケツ内の浮遊物を流し入れ、回収します。この作業を2回繰り返した後に、ウォーターセパレーション（水洗選別）という作業に進みます。バケツに残った残留物を上段5mm、下段1mmの網（ふるい）をセットした柵の上段部分に置いて、揉み解しながら、上から水を流し続けます。その後、網の上に残った残留物をシートの上に置き、乾燥させた後、遺物を分類する作業に移ります。

私はフローテーション作業を行いながら、水に浮かぶ炭化物の一つ一つが考古学的に貴重な資料になるので、それらを一粒たりとも取り残してはいけないと思いました。（担当：I16V015 太田康幹）

オケオ遺跡がある村には、南部社会科学院考古学研究センターの研究拠点があり、調査団の方々はこちらで寝泊まりしています。私たちはここでキエン先生に教えていただきながら、ウォーターセパレーションで採取した残留物から、さらに遺物を分類しながらピックアップする作業を行いました。この作業ではガラスビーズ、その原材料となったガラスの破片、炭化物、炭化米、植物片、種、動物骨、ネスト、土器片などが採取できました。作業手順は残留物を手元に適量取り分け、ピンセットを使って遺物をピックアップしていくというものです。遺物は種類ごとにボックスに取り分け、その後、袋に収納しました。調査団の方々の話では、魚類の骨なども採取できるとのことでしたが、今回は採取できませんでした。ビーズは残留物の大半を占める砂利や小石と違い、目立つ色合いをしているので見つけるのが簡単でした。それに対し、植物片やネストは同系色だったため見つけるのが難しかったです。判別が難しいものは調査団の方に聞いて種類分けを行いました。色々と質問をしていくうちに、英語でなら意思疎通ができることから、改めて英語力の必要性を感じました。採取できた遺物の中で最も多かったものは炭化物で、逆に少なかったものは植物片でした。本来、植物片はウォーターフローテーションの工程で採取されるものなので数が少ないことは納得できるのですが、逆を言えば採取に漏れがあるということになるので、採取の工程を重ねることの重要性を感じました。

今回採取したビーズには赤、オレンジ、黄、水色、紫、茶色、黒といった様々な色がありました。数は赤が最も多く、紫や茶色、黒は非常に少なかったです。

同じ色でもツヤのあるもの、無いものがあり、黒のビーズに関しては模様がついているものがありました。ほとんどのビーズは丸型だったのに対し、模様が入ったものは円筒形に近い形をしていました。大きさは1センチ弱のものから1ミリ程のとても小さなものもあり、どのように加工・製作したのか興味深いです。（担当：I16V052 難波勝士）

